

# 松本市竹渕・南原遺跡

—緊急発掘調査報告書—



1986.3

長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会

# 松本市竹渕・南原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1986.3

長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会

# 序

この遺跡調査は県営ほ場整備事業北六区地区内にあり、区画整理工事を施行するに先立ち緊急発掘調査し記録保存したものです。調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託し発掘調査が行なわれました。

その結果数多くの遺物出土を見、地区の歴史を知るうえで貴重な資料となることと想います。

この発掘調査が計画どおり完了出来ましたことは、県、市、教育委員会の適切なご指導と、お忙しいなか、調査団に参画され発掘調査にあたられた皆様のご尽力のためとの感謝しております。

また遺跡発掘が支障なく出来ましたことは北六区土地改良区の役員、地元関係者のご協力とご理解によるものであり、心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

長野県中信土地改良事務所長 大山 忠晴

# 序

この度県営ほ場整備事業を施行するにあたり所管の中信土地改良事務所より埋蔵文化財調査の委託をうけ、竹瀬・南原遺跡の発掘調査を実施いたしました。

寺地区は東方の赤木山遺跡群をはじめ数多くの遺跡があり、特に百瀬遺跡は弥生時代中期終末の標式遺跡として学界にも広く知られており、考古学研究史上からも欠かすことのできない重要な遺跡であります。このことは研究者の先生方の熱意はもとより地元の皆様方の古代文化に対するつよい关心と情熱があったればこそ成し得たものと信じております。

今回調査の遺跡は寺地区でも北端に位置し、牛伏川と田川の合流点近くの沖積地であります。以前よりこの周辺で遺物の出土をきいており、今回の調査となつたものであります。調査の結果は本文に詳述されているように、中・近世の造構を検出し、当時の人々の生活の一端を伺い知ることができました。

炎天下調査にご協力いただきました先生方および地元の皆様に深く感謝申し上げると共に、この調査についてご指導ご協力をいただいた関係機関に厚く御礼申し上げ、本誌が活用されることを祈り序といたします。

昭和61年3月

松本市教育委員会  
教 育 長 中島 俊彦

## 例　　言

1. 本書は昭和60年7月15日から8月9日にかけて行なわれた松本市舟白瀬渕に所在する竹筒遺跡・南原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県中信土地改良事務所より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
3. 本書の編集は事務局が行ない、執筆は第2章第1節 神沢昌二郎、第2節 小口妙子、第3章第2節遺物及び第5章 神沢昌二郎、第2図（地層概念図）森義直その他の項目は熊谷康治が行なった。なお執筆にあたり、宮下健司氏に助言、教示を得た。記して謝意を表する。
4. 本書作成にあたっての作業分担は次の通りである。  
　　遺構 製図、トレース：向山かほる、熊谷康治  
　　遺物 復元、実測、トーシス：土橋久子
5. 本書掲載の遺物写真は岩渕世紀氏が撮影した。
6. 柱根及び礎板の樹種鑑定は森義直調査員が行なった。
7. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

# 目 次

## 第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録	3
第2節 調査体制	3
第3節 作業日誌	4

## 第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境	5
第2節 周辺遺跡	8

## 第3章 竹瀬遺跡の調査

第1節 調査の概要	9			
第2節 遺構と遺物	12			
第1号住居址	第2号住居址	獨立柱建物址	柱穴群	出土遺物

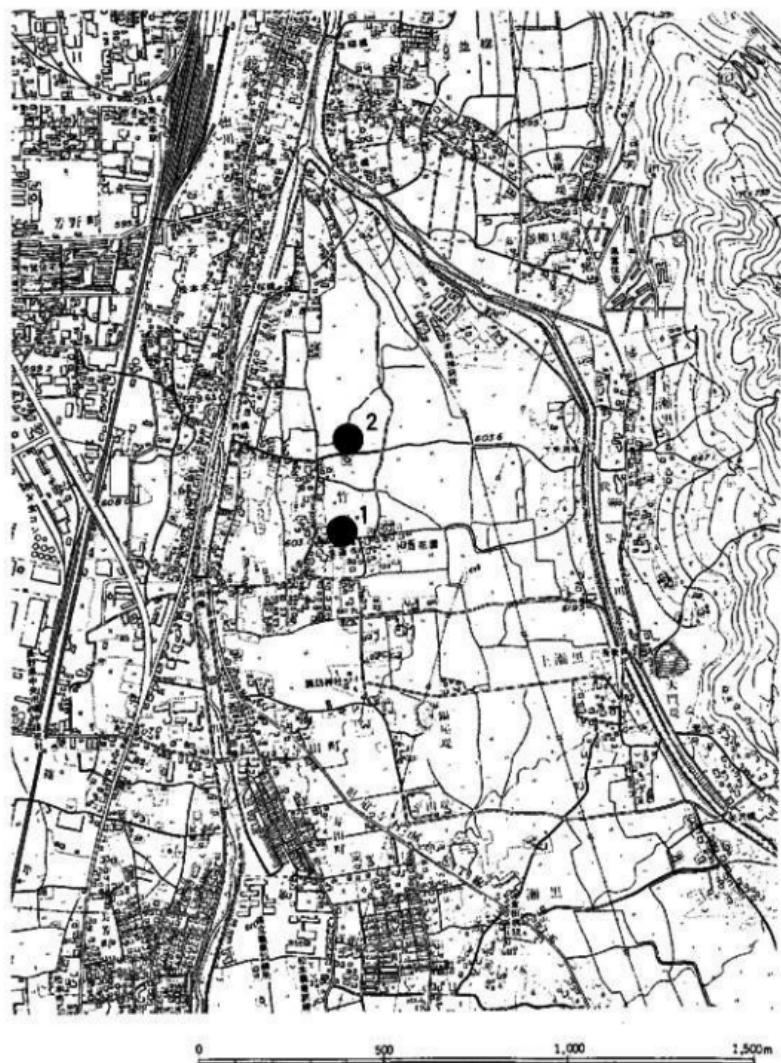
## 第4章 南原遺跡の調査

## 第5章 調査のまとめ

# 図 目 次

第1図 調査地の位置	2	第9図 柱穴(2)	19
第2図 地図概念図	6	第10図 柱穴(3)	20
第3図 周辺遺跡	7	第11図 南原遺跡全体図	25
第4図 調査地の範囲	10	第12図 出土遺物 (1)	27
第5図 第1・2号住居址	11	第13図 出土遺物 (2)	28
第6図 建物址1	15	第14図 出土遺物 (3)	29
第7図 建物址2	16	第15図 出土遺物 (4)	30
第8図 柱穴 (1)	17		

## 付 図



1. 竹瀬遺跡      2. 南原遺跡

第1図 調査地の位置

# 第1章 調査経過

## 第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和59年7月25日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は中信土地改良事務所  
花岡主事外市教委神沢他。
- 昭和60年1月7日 昭和60年度補助事業計画書提出。  
4月5日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。  
4月24日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。  
4月24日 昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。  
5月16日 昭和60年度県営は場整備事業北六区地区竹瀬・南原遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘  
調査委託契約を結ぶ。  
5月18日 南原・竹瀬遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。  
6月17日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。  
7月25日 昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。  
10月18日 南原・竹瀬遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 昭和61年1月17日 昭和60年度県営は場整備事業に伴う南原・竹瀬遺跡発掘調査委託契約の変更。  
2月14日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田憲幸指導主事。  
2月18日 南原・竹瀬遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

## 第2節 調査体制

監査：中島俊彦（松本市教育長），調査担当者：神沢昌二郎，調査員：森義直  
発掘作業員：酒井栄，今井源郎，鳥羽鴻一，永沢辰巳，原角内，長沢多穂，波場真澄，赤羽つや  
江，百瀬幸子，中島千恵子，百瀬裕子，河西製婆吉，藤本芳雄，中島新蔵  
事務局：浜憲幸（社会教育課長），神沢昌二郎（同課長補佐），柳沢忠博（同上事），熊谷康治  
(同主事)，阿久沢昌子

### 第3節 作業日誌

- 7月15日 月 晴 発掘開始。重機による排土作業。
- 7月16日 火 晴 小松他14名による検出作業。排土作業継続。
- 7月17日 水 晴 小松他12名にて昨日に続き検出作業。
- 7月18日 木 晴 藤本他11名にて竹測1・2号住及びピット群の掘り下げ。南原検出作業継続。
- 7月19日 金 晴一時雨 小松他10名。昨日の繼續作業。
- 7月20日 土 薄曇 中島他4名。竹測調査地北側を掘り下げる造構の輪郭を把握する。
- 7月23日 火 晴 小松他7名。測量のポイント設定。1・2住断面図作成。
- 7月24日 水 晴 小松他14名。竹測発掘区域の拡張及び検出。ピット1～3、5の断面図作成。
- 7月25日 木 晴 藤本他9名。遺物とり上げと検出の続き。南原は重機にて排土及び検出。
- 7月26日 金 晴 小松他5名。ピット半剖及び断面図作成。
- 7月27日 土 晴 小松他10名。昨日の繼續作業。柱痕確認。
- 7月29日 月 晴 小松他2名。ピット半剖及び断面図作成。
- 7月31日 水 晴 小松他8名。ピット半剖及び断面図作成。
- 8月1日 木 晴のち曇 百瀬他8名。昨日の繼續作業。東側にトレーンチ設定。
- 8月2日 金 晴 藤本他6名。ピット半剖及び断面図作成。拡張部にトレーンチ設定。
- 8月3日 土 晴 森義直調査員と小口・熊谷の3人にて周辺地層の調査及び全体図を作成する。
- 8月5日 月 晴 中野他2名。礫を持つピットの実測、写真撮影及び半剖、全体図作成続行。
- 8月6日 火 曇 中野他1名。ピットの断面図作成と掘り上げ。
- 8月7日 水 曇 中野他1名。ピット内の木材のとり上げ及び平面図にレベルを入れる。
- 8月8日 木 晴 中野他1名。昨日に統いてピット内の木材とり上げと平面図にレベルを入れる。
- 8月9日 金 晴 土層の確認とピット内の台石をとり上げて本遺跡の発掘作業を終了する。



竹測遺跡 作業風景

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 自然的環境（第2図）

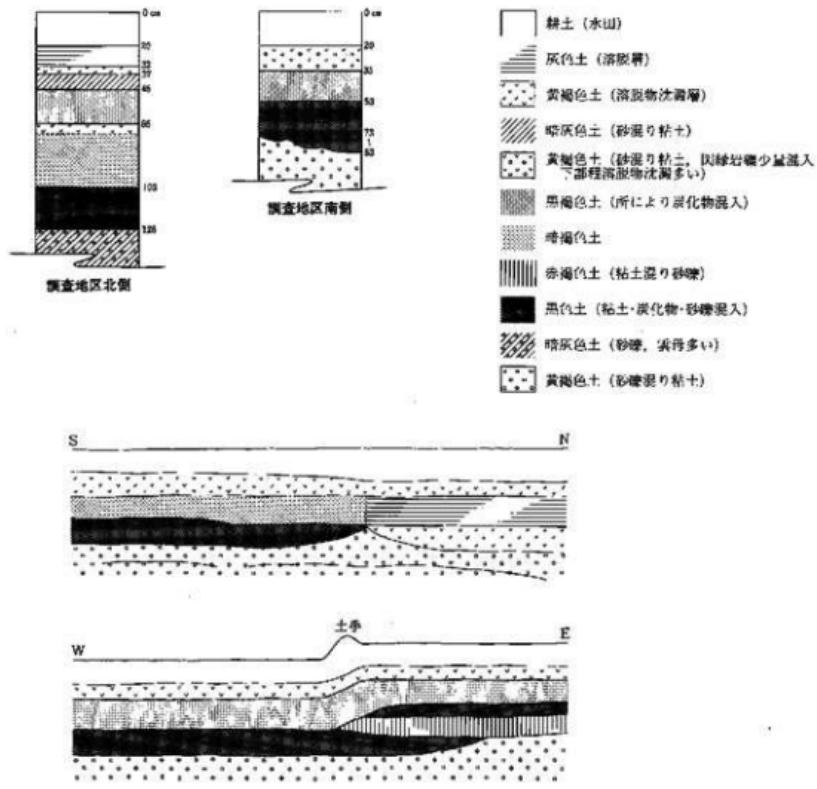
**1.立地** 本遺跡は松本市街地の南東に位置し、東に鉢伏山地（鉢伏山、横峰、高ボッチ）と瀬黒山の中山丘陵を見、鉢伏山より下る牛伏川と、塩尻より流下する田川の合流点近くにあり、北西に傾斜する水田地帯である。この地周辺には湧水が多いがシブが多い。本遺跡の南側には人家があり、西側にも人家が続いている。牛伏川は後述するように災害の多い川で、流出する砂礫によって大井川となっており、また西側の田川も、本遺跡より河床面は高い。

**2.災害の歴史** 竹渕地区を襲った牛伏川の洪水を古記録から拾い出してみると下記のとおりである。

- ・享保12年（1727）7月 牛伏川は下瀬黒で切れ、下瀬黒、竹渕、平田まで押し流し、300町歩が被害にあった。
- ・寛延3年（1750）6月 牛伏川は下瀬黒字下川原で破堤し、下瀬黒、竹渕の約50町歩が流失し、砂石が累々として、永く復旧しなかった。
- ・宝曆13年（1763）10月 牛伏川は白川地区字上川原で切れ、白川、百瀬、小池を荒し、水は更に田川を貫いて平山、野瀬、小島にまで及んだ。実に2,000余町歩が被害にあった。
- ・天明元年（1781）6月 白姫、上瀬黒、竹渕の良田を荒らす。500余町歩、60戸を流失。
- ・文化12年（1815）秋 塙原区より西に溢れ、上瀬黒、下瀬黒、竹渕の三区の田地200余町歩を流失。
- ・弘化元年（1844）10月 上瀬黒鯉沢西において破れ、上瀬黒、下瀬黒、竹渕の人家・田地を浸して西田川に入る。流尖田地180余町歩。
- ・明治14年（1881）竹渕字井前にて西に溢れ、田10余町歩流失。
- ・明治29年（1896）7月21日 白姫、上瀬黒の二ヶ所で切れ、竹渕一円を押し流し山川に入り、更に田川も切れて、平田、出川、小島など人家多數を流失。竹渕は70戸の3分の2が水中に浮んでいるようであった。松本、芳川合せて350町歩余が流失した。
- ・明治29年（1896）11月 上瀬黒大口にて破れる。下瀬黒、竹渕両区の大半を浸す。

（牛伏川砂防工事沿革史より抜き）

**3.地層** 本遺跡の地層は上述のごとく、洪水による砂礫が堆積しており、概念図でみるように



第2図 地層概念図

耕作土、黄褐色土（溶脱物沈殿層）、暗褐色土（又は灰色土）、黒色土（又は黄褐色土・溶脱物沈殿層）、暗黄褐色砂利混り粘土層と続いている。発掘地点南側でみても耕作土、砂混り粘土（黄褐色、下部溶脱物沈殿多し）、砂混り粘土（暗褐色～黒褐色）、真黒色土（粘土・炭化物・砂・小礫を含む）、砂礫混り粘土層（黄褐色）の順となり、第三層の一40cm前後より遺構・遺物が検出されている。第4層の炭化物については湿地帯に生育していた植物の堆積したものである。場所によって砂礫層の深さが変化しているが、発掘地点では一73cmから砂礫層になる。これでみると、洪水で砂礫がたまり、その上に沈殿した細粒砂土に植物が生成して黒色土層をつくり、更に緩い堆積によって砂まじりの粘土層ができ、それに水田が開発されたものと思われる。



- |           |          |          |
|-----------|----------|----------|
| 1. 平烟遺跡   | 8. 野瀬遺跡  | 15. 若宮遺跡 |
| 2. 弘法山古墳  | 9. 平田遺跡  | 16. 百瀬遺跡 |
| 3. 山行法師遺跡 | 10. 南原遺跡 | 17. 耳容古墳 |
| 4. 漆黒遺跡   | 11. 竹瀬遺跡 | 18. 白川遺跡 |
| 5. 出川遺跡   | 12. 向原遺跡 | 19. 野田遺跡 |
| 6. 来原遺跡   | 13. 本郷遺跡 | 20. 村井遺跡 |
| 7. 五輪遺跡   | 14. 南浦遺跡 | 21. 小屋遺跡 |

第3図 周辺遺跡

## 第2節 周辺遺跡(第3回)

竹瀬を中心とする田川中流地帯は松本市の南に位置している。古來からの暴れ川である田川、牛伏川をかかえ、また西側を流れる奈良井川の影響も受けたこの地域は、不安定な場所であった為か遺跡数が少ない。以下、時代別に説明を行なう。

縄文時代に属するのは、田川の氾濫原にある向原遺跡、白川遺跡、野田遺跡と、中山丘陵西側沿辺に位置する平畠遺跡、山行法師遺跡等で、これらから縄文時代の遺物が採集されている。

縄文時代の遺跡が少ないので、弥生時代には田川の氾濫により形成された微高地・後背湿地等を中心に大規模な遺跡が現われる。田川の右岸では、台地縁辺に百瀬遺跡があり、他数箇所から遺物を出土していることから、向原遺跡を含めての広範囲な遺跡の存在が想定される。現在の所百瀬遺跡は田川右岸に点在する弥生遺跡の北限であり、また、住居址1軒と多数の遺物が出土したことでも著名である。<sup>註1</sup> 百瀬遺跡から約2.5km北上した田川左岸には、牛伏川との合流地点を中心とする一帯に、出川遺跡を主とする大規模な遺跡の存在が考えられる。しかし、広範囲にわたる本調査が殆どなされていない為、詳細は不明である。当遺跡より採集された上器の中に、弥生時代から古墳時代の初めにかけてのものも多いことから、中山丘陵北端に位置する古式の前方後方墳である弘法山古墳との関係が注目される。田川流域に弥生時代の遺跡が発達したのに対し、牛伏川流域では、瀬戸内遺跡のように局地的なあり方を示している。

古墳時代の遺跡として、田川左岸に五輪遺跡と東原遺跡があるが、詳細は不明である。当地域は古墳分布の空白地帯で、わずかに弘法山古墳と耳塚古墳が知られているくらいである。昭和49年に満喰が行なわれた弘法山古墳<sup>註2</sup>は、県内最古の古墳と判明し、古墳時代の研究に一石を投じた。耳塚古墳は現在若干の封土を残すのみで、直刀の出土が伝えられている。

奈良、平安時代以降の遺跡は、遺物の採集地が多い為に不明確さを残すが、田川右岸には向原遺跡と今回調査を行なった竹瀬遺跡、南原遺跡がある。これに対しても左岸では、村井遺跡から小原遺跡一帯と、本郷遺跡より野瀬遺跡と平田遺跡を経て東原遺跡に至る一帯と面的な広がりを持ち、右岸の遺跡のあり方とは様相を異にしている。

当地域は各時期の重要な遺跡を含んでいながら正式な調査がほとんど行なわれていない。今後の調査、研究が一層望まれる。

### 参考文献

藤沢宗平他「東筑摩郡、松本市、坂城市跡」昭和58年

### 註

(1) 藤沢宗平「長野県東筑摩郡坂村百瀬弥生式遺跡調査報告」『信濃』3-8 昭和56年

(2) 松本市教育委員会「弘法山古墳」昭和53年

## 第3章 竹渕遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

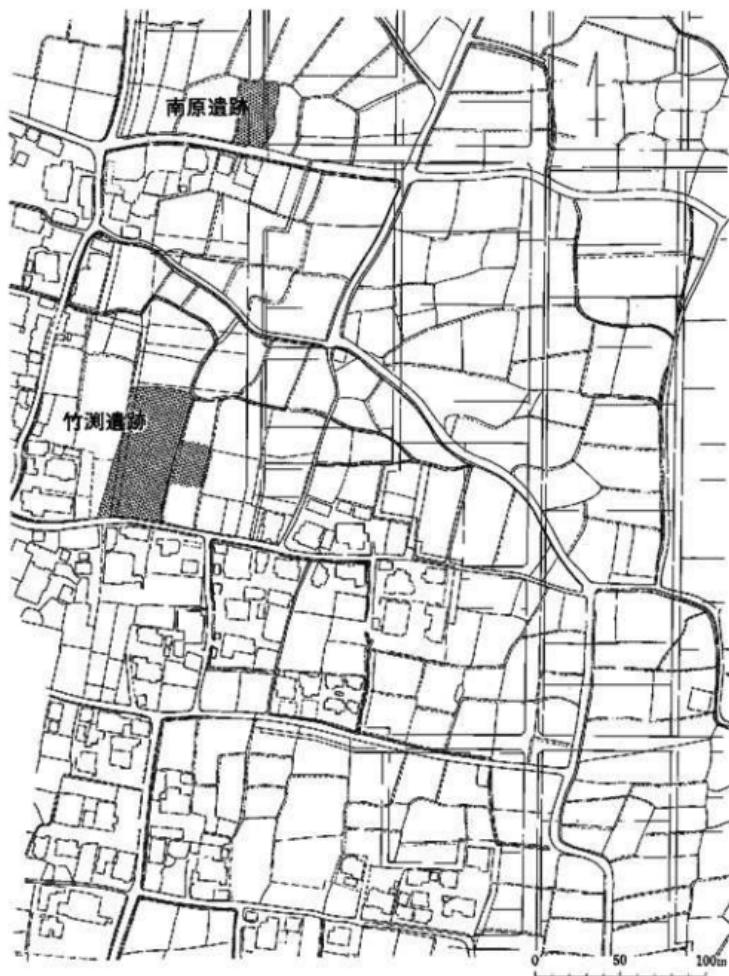
竹渕遺跡は從前より遺物の出土が知られていたが、本格的な調査例がなくまた遺物の出土がおもに現在の集落と重なるため、遺跡の範囲等実態は不明であった。

今回同地区内の県営は場整備にあたり、初めて調査を計画し、調査地を集落の東北側に位置する水田地帯に南北に長く設定した。調査実施面積は2,150m<sup>2</sup>である。

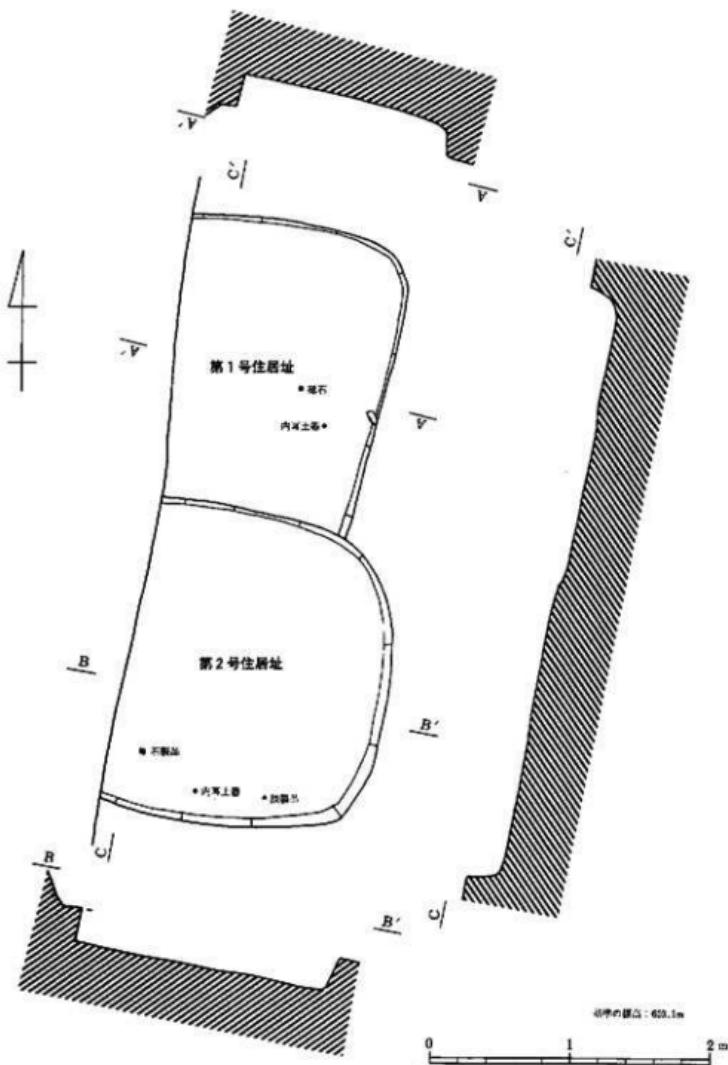
確認された遺構は、竪穴住居址2軒、建物址2軒、柱穴群、と以前の水田址と思われるもの1基、暗渠排水1基である。このうち水田址と暗渠排水は近代のもので、暗渠排水は現在でも使用されており、この水量は豊富である。

遺構別に概略を記すと、竪穴住居址は2軒切り合っており、半分以上が調査地区外にかかるため全容は確認できなかったが約2×2mの長方形で遺物出土は少なく、内耳鉢片、鉄器、砥石の数点であり、1、2号住居とも同程度の規模内容であった。検出された柱穴群のうち、2基だけは掘立柱建物址と明確に判別できる。他の柱穴についても柱痕、礎石、礎板等が確認できるものが多く、建物址の存在が推定できる。同地区は、牛伏川の伏流水による地下水が豊富なため、水位が高く木材の残存する可能性も高いと思われ、柱穴の内に柱根などが残っているものが見られた。また、柱穴及び柱痕内に焼土が混入しているものも見られた。遺物は、大半が検出面からであり、東側には中近世陶器片、柱穴群検出面はほとんどが内耳鉢片で、柱穴内からの出土は数点であった。

柱穴群の北側に、暗渠排水と以前の水田址が検出された。暗渠排水は調査地区を東から西に横切っており、上手で余り、地下へ浸透した水を排水を通して下手の水田へ供給している。現在でも水田の端に水口を設けてあり、水の使用時には豊富な水量が水口を潤おしている。水田址については調査地区の北側にあり、北と西側が地区外まで延びている。調査地区は、2反歩強の水田1枚であり、これは基盤整備以前の水田としては大きな方であり、以前に2枚の水田を1枚にしたことも充分考えられるものである。



第4図 調査地の範囲



第5図 第1・2号住居址

## 第2節 遺構と遺物

### 第1号住居址 (第5図)

調査地区の中央西端に位置し、大半が地区外にかかる。また2号住に切られる。平面形状は方形または長方形を呈するものと思われる。規模は、南北約170cm東西約200cm程度と推定する。壁は残存高25cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれていて良好である。覆土は暗茶褐色土で、鉄分及び炭化物、焼土粒を含み、下層ほど砂質となる。柱穴及び他の施設については確認できなかった。遺物の出土は、図示し得た内耳銀片1点、砥石1点のみであった。2点とも床面及び床面付近から出土した。

### 第2号住居址 (第5図)

調査地区の中央西端に位置し、1号住を切る。平面形状は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、南北220cm、東西は推定で約200cm程度を測るものと思われる。壁の残存高は22cmを測り、1号住よりやや浅い。壁の状態は、ほぼ垂直で東壁側は下層の礫層を僅か掘り込んでいる。覆土の状態は1号住とほぼ同様で、鉄分、炭化物、焼土を含む暗茶褐色土である。柱穴及びその他の施設は確認できなかった。遺物は、床面上及び床面付近から内耳銀片、釘と思われる鉄製品、使用痕のある石が出土し、覆土上層からは高环状部片が出土したが、これは他からの混入物と思われる。

### 掘立柱建物址 (第6・7図)

今回の調査では柱穴と思われるビットが多数確認されたが、建物址の配置、柱穴内部の検討等は今後の課題である。本稿では、確認できた2軒だけについて記述する。

建物址1は、調査地区の西側南寄に位置する。柱穴はP1～P4である。規模は、2間×2間の側柱式で、柱間隔は3,200×1,800cmを測り東西方向に長軸がくる。柱穴の形状及び規模は、径40cm前後の円形に近い不整形で、深さはP1が43cm、P2が35cm、P3が28cm、P4が35cmである。柱底は確認できなかったが、内部には焼土塊及び焼土粒、炭化物の混入が見られ、P1・2・4は焼土塊が多量に入り、P3は焼土粒が少量で、炭化物は各柱穴とも少量混入している。またP1、2は焼土中に石が入っている。石の大きさは10cm前後であり、火を受けているものは見られない。遺物の出土は確認されなかった。

建物址2は、調査地区の中央部東寄に位置する。柱穴はP39・42・124・126である。規模は、2間×2間の側柱式で、柱間隔は4,500×3,100cmを測り東西方向に長軸がくる。柱穴の形状及び規模は、P39・124が40～50cm×30～40cmの長方形で、P42・126は40～50cm×30cmの梢円形を呈する。深さは浅く、P124が30cmを測り一番深い。柱底及び遺物は確認されなかった。

### 柱穴群 (第8・9・10図)

今回の調査で確認されたものは130個で、この内柱穴と思われるものが123個で、主にC～L軸及

び9~18軸の範囲に検出されている。建物の配置、柱穴内部の仔細な検討は今後の課題としたい。本稿では、柱痕及び礎石等が確認できたものを中心にして述べてみたい。本稿で言う礎石とは、礎板に対するもので、寺院址、官衙址等で言うところの礎石ではない。また、柱痕は柱跡だけ確認されたものを、柱根は柱自体も確認されたものと言う。

平面形は大きく分けて円形型と方形型がある。円形型の中には、円形を意図したと思われる不整円形、橢円形も含まれる。柱穴の平面形の内訳は、円形型94個、方形型29個と円形型が多数を占める。規模は、大形は円形型で102×60cm、方形型で75×52cm、小形は円形型で16×16cm、方形型で22×20cmを測る。深さは、深いもので60cm、浅いもので15cm程度である。柱痕が確認されたのは66箇、この内柱根も確認されたものは、P 20, 46, 82, 83, 92, 120の6箇である。次に礎石をもつものは20箇、柱穴内または柱痕内に石が入っているものは28箇、礎板をもつのは1箇である。次に各ピット別に若干述べてみたい。P 6は36×29cmの楕円形を呈し、柱痕内に多量の焼土が見られ、また上層に石をもつ。P 7は36×34cmのほぼ円形を呈し、底部に礎石、柱痕内に多量の焼土と上層に石を2個もつ。P 15は44×40cmのほぼ円形を呈し、柱痕は確認されなかった。上面に石と上層に内耳垢片が確認された。P 22は38×32cmのほぼ円形を呈し、中央に柱痕を残し、僅かに二重底になっていて底部には礎石がある。P 46は40×34cmの不整円形を呈する。柱痕は中央に位置し、内部に礎石及び柱根を残す。柱根は腐食しておりもろい。P 47は44×42cmのほぼ円形で、柱痕は中央に位置している。柱痕内には少量の炭化物及び焼土を含む。礎石は2個あり1つは柱痕をやや外れる。P 82は28×26cmのほぼ円形を呈し、柱痕は中央に位置する。礎石はなく直に柱を立てたらしく柱根のみ確認した。P 85は39×36cmの方形を呈し、柱痕は中央に位置する。柱痕内部に焼土と炭化物が混入し、柱痕を塞ぐ様に石が入っていた。P 86は38×38cmの円形に近い方形を呈し、柱痕は中央に位置する。多量に焼土を含み礎石をもつ。P 98は48×34cmの不整形で、柱痕は中央に位置する。底面部東側に石が重なって2個あり、礎石が動いていると思われる。P 107は38×37cmの円形で、柱根は確認できない。覆土上層に石が、底部には礎板を有する。今回の調査で礎板が確認されたのはP 107のみである。P 110は34×32cmの不整円形で柱痕は北東に位置する。柱痕内の中層東側に石があり、礎石が動いたものか、柱を固定するためのものか不明である。P 117は38×37cmの円形で柱痕の確認はできなかったが、覆土のほぼ中央に石があり、礎石と思われる石の上に重なっている。P 120は52×48cmの円形で中央に柱根を残す。礎石はなく直に柱を立てたと思われる。P 120内出土の柱根のみ図示し得た。残存高は24cm、径10cmを測る。樹種は赤松である。

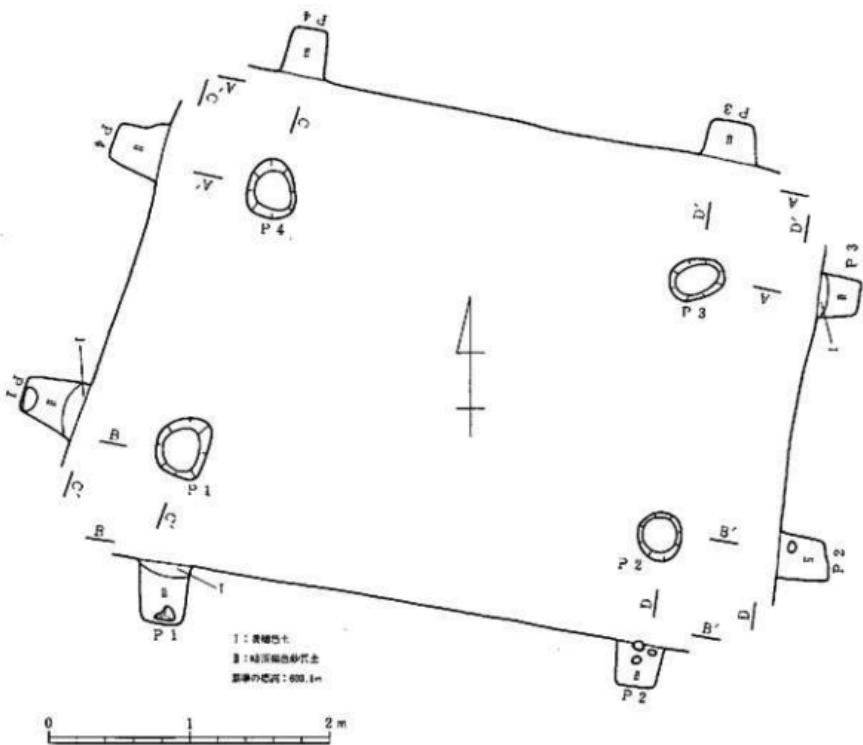
#### 出土遺物（第12・13・14・15図）

出土遺物の大半は中世の土師質土器であり、そのほとんどが内耳土器片とおもわれる。遺構別、出土地点別に列挙し、また、竹炭遺跡、南原遺跡を合せて記述したため時代順にはならなかつたし、また、各項目については觀察表に記載されているのでダブルの部分もあるが、特徴的なことを主に述べてゆきたい。なお、石器、鐵器等は点数が少ないので表に記載していないので、煩雑ではあるが

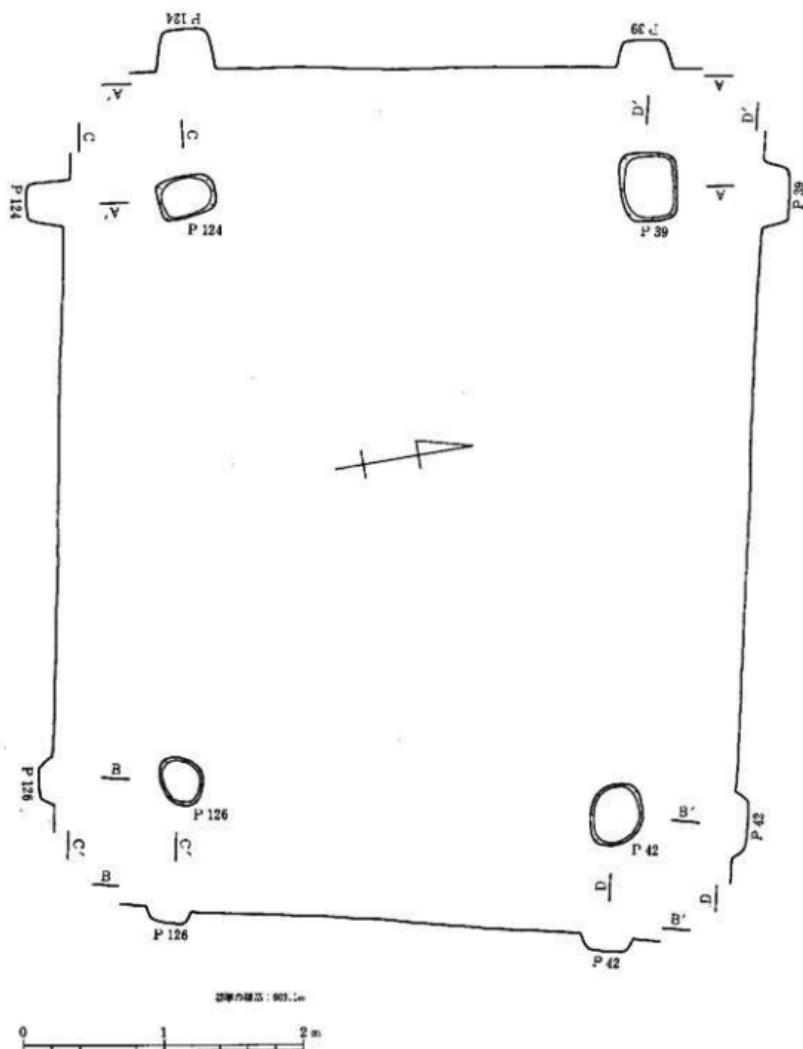
数字的なものを書き加えてある。1～29は竹瀬遺跡、30～36は南原遺跡出土のものである。

1は灰釉陶器、2は須恵器とともに环の小破片である。3は土瓶の底部で底部外周は釉を搔きおとしている。4～7は内耳土器でいずれも把手の耳がついている。4は図上復元で全形のわかるものである。口辺が“く”の字状を呈するので、調整は丁寧で内外面はなめらかであり、腹内面中央部が特に黒化している。外面胴くびれ下に沈線が一本はしり、その下に三本の斜線がはいる。口縁耳部取付部分のみ棱が残り、耳は折り曲げた様にして付けである。底部近くにも棱がある。5も“く”の字状彫曲がある。8は香炉片で型押しかと思われる花菱状の文様に緑紫色の釉がかかっている。9～10も内耳土器と思われるが、9は内面に巻状の沈線文がある。11は土師質土器で内耳鍋とはいいにくい底部をしている。壺状のものか。12・13は両底器の碗で12は鉄釉、13は白磁であるが外面にスリによる文様がある。14は土師質土器片を使った上製円板である。15も土師質土器杯片であるが、口径に比して器厚が厚い。16は陶器碗、17は須恵器环、18は土師質土器坏片である。18は柔かく褐色の塊を含む胎上である。19は内耳土器の底部、20・21は磁器で20が染め付け、21が青磁である。21には把手がついていたらしいが、欠損部がドスグためどんな器形になるか不明である。22～24は内耳土器である。22・23はともに口辺部に三段のくびれがつく。25は弥生時代のものと思われる高環で、身内面に矢が残っている。脚部はかなり開いている。26は1件出土の粘板岩製の砥石でねじれ状に使いこんであり、三面に研磨のあとが残る。現在長6.8、巾3.4、厚さ1.0cmである。27は2件出土の砂岩の磨石で1面が研磨され、上部に浅いくぼみがある。半欠で現在長13.0、巾7.5、厚さ6.0cmである。28は釘であるか、釘はこの2件より1点出たのみで、4.6cmの長さで角釘であり巾は0.5cm、頭は切り曲げてある。29は安山岩の石臼で検出面より出土したものである。臼の半欠したものである。目は6分面、副溝は10本目であるが磨りへって外側はほとんど目がつぶれている。ふくみは大きく、芯棒孔は貫通しており、上は口徑4cmで深さ5cm、下は口徑5.5cmで深さ6cm。共に中に入る程すばまって径が3cmあまりになる。底のえぐりも大きい。外周も欠けているが割離の仕方から加熱をうけたものらしい。

30からは南原遺跡の出土遺物であるが、本地では全部で20片あまりしか出土していない。そのうち岡示したものは6点である。時期的には10～18世紀あたりと山本が、断片的でその主な時期は特定できない。30は灰釉皿の口縁部で、釉はつけがけらしい。31は須恵器环で口辺下で縫がつく。内面はヨコナデで微粒子が目立つ。32・33は陶器で32は皿、33は皿か碗である。ともに柔らかい胎土で釉は黄灰色で艶がある。32は花びら、33は鳥の文様が見込に描かれている。33は重ね焼のため見込みに巾広く釉を搔きとっている。ともに高台内まで釉がかかっている。34は粘板岩の砥石である。欠けているが多分四面とも使われていたのではないか。現在は三面が磨られている。形は平行四辺形をしており、墨書き使いよりも手に持つて使ったものではないか。現長10.5、巾3.2、厚さ2.8cmである。35は鉄器である。形は鉗形であるが、その厚さは5mmと薄く包丁にも似ている。柄には止め穴がなく、刃も薄い、現長14.0、巾14.3cmでともに検出面出土である。

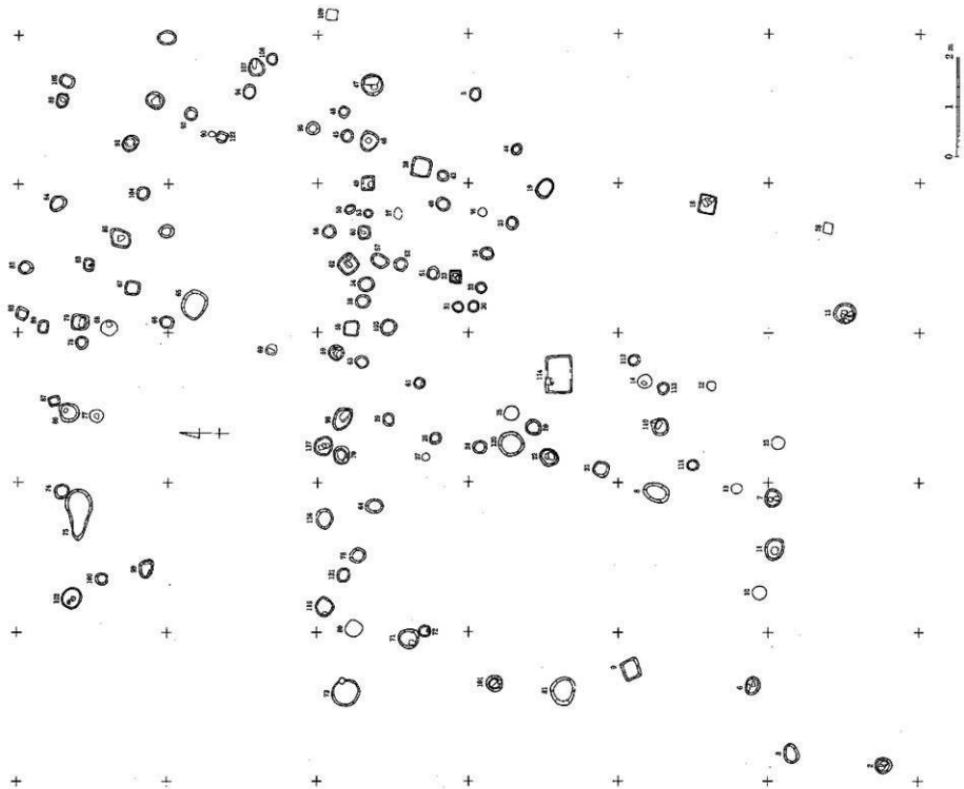


第6図 遺物址 1

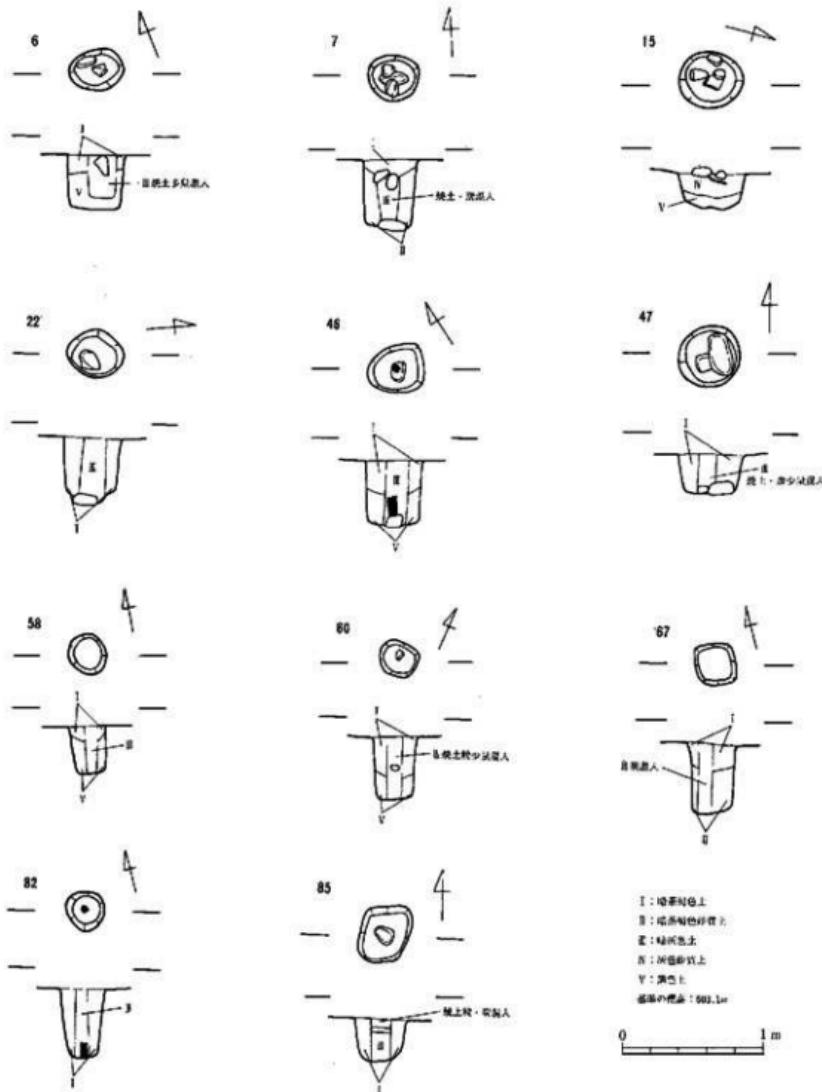


第7図 建物址 2

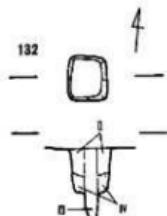
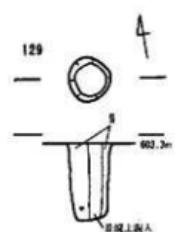
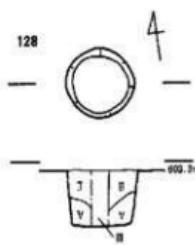
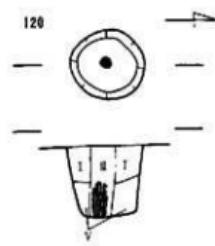
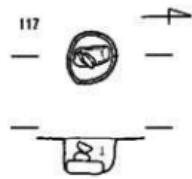
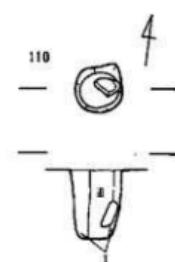
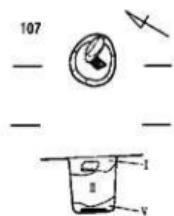
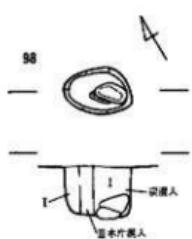
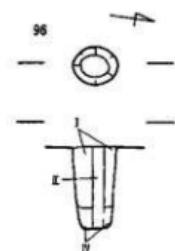
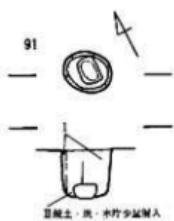
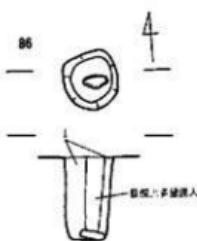
第8圖 柱穴 (1)







第9図 柱 穴 (2)



1: 墓室褐色土  
 2: 墓室褐色砂質土  
 3: 柱洞土  
 4: 墓室少孔土  
 V: 黑色土  
 距地表深度: 62.3m

0 1 m

第10図 柱 穴 (3)

## 竹洞遺跡柱穴一覽表

番号	位 置	平面形	規 模 (cm)	石			木			炭化材	焼上炭化物	遺 物	備 考
				住	礎	石上	内	部	板				
1	B12~C12	不整形	46×40	54	○	○	○	○	○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上多量
2	D12	円形	33×32	47	-	-	-	-	-	-	-	-	焼上少量
3	"	円形	40×30	46	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4	C12~C13	不整形	42×32	35	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	H14	円形	26×22	25	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
6	D13	"	36×29	42	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
7	E12~E13	不整形	36×34	50	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8	E13	円形	52×37	31	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
9	D13	方形	39×34	42	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
10	E13	円形	30×28	-	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
11	F13	不整円形	44×38	-	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
12	E12~E13	円形	20×19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13	E13	"	23×20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	F13	"	29×26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	G12	"	44×40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	E10	円形	30×29	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17	F10	楕円形	37×22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18	G13	方形	40×34	34	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
19	G14	隅丸方形	42×32	39	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
20	F14	円形	32×30	56	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
21	"	隅丸方形	31×29	37	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
22	"	円形	38×32	46	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
23	F12	"	26×24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	F14	隅丸方形	26×24	42	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
25	"	円形	24×24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	F15	"	22×22	38	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
27	"	"	14×14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	G12	方形	18×23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	F15	檜円形	26×21	41	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
30	G14	円形	23×22	26	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
31	G15	"	22×20	29	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
32	G14	"	22×22	30	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量
33	G15	方形	26×23	40	○○	○○	○○	○○	○○	○○○○	○○○○	○○○○	焼上少量

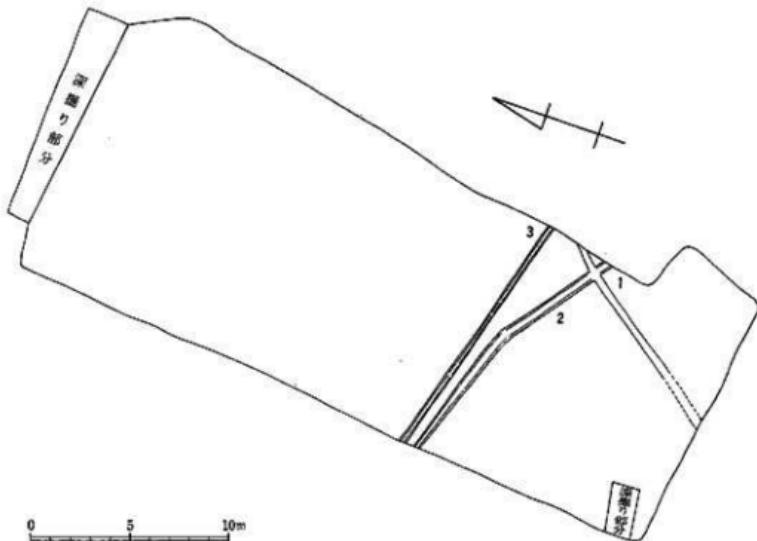
番号	位置	平面形	規格(cm)	長軸×短軸		横穿孔	柱	頭	碰石	上面	内部	鐵板	柱根	碳化材	木	燒上	炭化物	造物	備考
				長軸	短軸														
34	G12	円 形	26×24	40	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
35	“	△ 形	24×24	45	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
36	G15	橢円 形	18×18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
37	H15	橢円 形	24×15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
38	I12	方 形	40×40	31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
39	G15	隅丸方形	27×24	38	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
40	K11~K12	円 形	16×16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
41	H15	橢円 形	46×37	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
42	H14	円 形	20×20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
43	H15	△ 形	22×21	26	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
44	H15	△ 形	25×25	50	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
45	H15	不整形	40×34	50	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
46	G15	円 形	44×42	30	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
47	G15	△ 形	22×20	40	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
48	G15~H15	長方形	28×24	34	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
49	G15	橢円 形	22×18	25	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
50	G15	不整円形	25×23	42	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
51	G15	△ 形	25×25	43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
52	G15	△ 形	19×16	20	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
53	G15	△ 形	30×28	45	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54	F15~G15	方 形	30×28	38	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55	G15	円 形	26×26	48	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
56	G15	橢円 形	36×25	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
57	G15	△ 形	29×26	36	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
58	G15	△ 形	30×28	29	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
59	F15	隅丸方形	28×24	45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
60	G15	円 形	23×22	39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
61	F15	橢円 形	38×37	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
62	G15	方 形	28×24	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
63	F15	△ 形	34×28	37	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
64	E15	橢円 形	60×48	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
65	G16	円 形	28×26	43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
66	G16~G17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

番号	位置	平面形	規 模 (cm) 長幅×幅輪	深 度 (cm)	石			木	炭化材	焼 土	炭化物	遺 物	備 考
					柱	棒	鍛						
67	G17	方	30×28	50	○						○		
68	F17~G17	円	34×28	—									
69	F16	△	22×21										
70	F15	棒	34×28	34									
71	D15~E15	円	40×38	—									
72	D15	△	24×22	31									
73	D15	△	56×52	30									
74	E17	△	29×29	17									
75	不整	形	102×60	40									
76	E15	円	30×28	27									
77	F17	△	28×26	—									
78	△	△	24×24	30									
79	G17	隅丸方形	35×31	40	○	○	○						
80	D15~E15	△	32×32	56									
81	D14	棒	57×48	27									
82	G17	円	28×26	50									
83	溝丸方形	△	26×22	—									
84	△	棒	39×28	45									
85	△	△	39×36	18									
86	F17	△	38×38	57									
87	△	△	22×20	32									
88	H17	隅丸方形	28×23	39	○	○	○						
89	G17	長方形	25×20	40									
90	H16	棒	14×12	—									
91	H17	△	36×29	28									
92	H16	△	25×24	49									
93	G17~G18	方	24×23	27									
94	H16	円	23×25	—									
95	H15~H16	△	28×25	22									
96	G16~G17	△	28×28	50									
97	H17	隅丸方形	36×33	30	○	○	○						
98	F15	不整	48×34	35									
99	E17	△	36×26	30									

番号	位置	平面形	規格 (cm) 長幅×短幅	厚さ mm	石			木	板	柱	鋼化材	焼土	炭化物	塗物	備考
					柱	旗	基礎								
100	E17	円 形	24×23	25									○		
101	D14	◆	34×32	50				○					○	○	
102	E17	◆	40×38	44									○	○	
103	F15~G16	◆	30×30	34											焼土少量
104	G17	◆	28×25	42											
105	H17	隅丸方形	30×24	42											
106	H16	楕円形	36×28	31				○							
107	◆	◆	38×32	40											
108	◆	◆	22×22	26											
109	I15	方 形	23×22	—											
110	F13	不整円形	34×32	47											
111	◆	◆	23×21	30											
112	◆	◆	23×22	40											
113	◆	◆	24×22	42											
114	F14	長方形	75×62	60				○							
115	E15~E16	隅丸方形	36×34	58											
116	◆	◆	40×34	39				○							
117	F15~F16	円 形	39×37	23											
120	F14	◆	52×48	30											
121	E15	楕円形	29×24	15											
122	H16	隅丸方形	22×21	29											
123	J11	円 形	44×39	36											
124	I11	方 形	42×30	30											
126	J10~J11	楕円形	38×30	—											
128	M11	円 形	50×30	42											
129	◆	◆	30×30	50											
130	N11	◆	52×46	32											
131	N10	方 形	42×(24)	26											
132	O10	◆	32×28	53											
133	M11~N11	円 形	65×61	60											
134	N10	方 形	45×41	25											
															焼土多量

## 第4章 南原遺跡の調査（第11区）

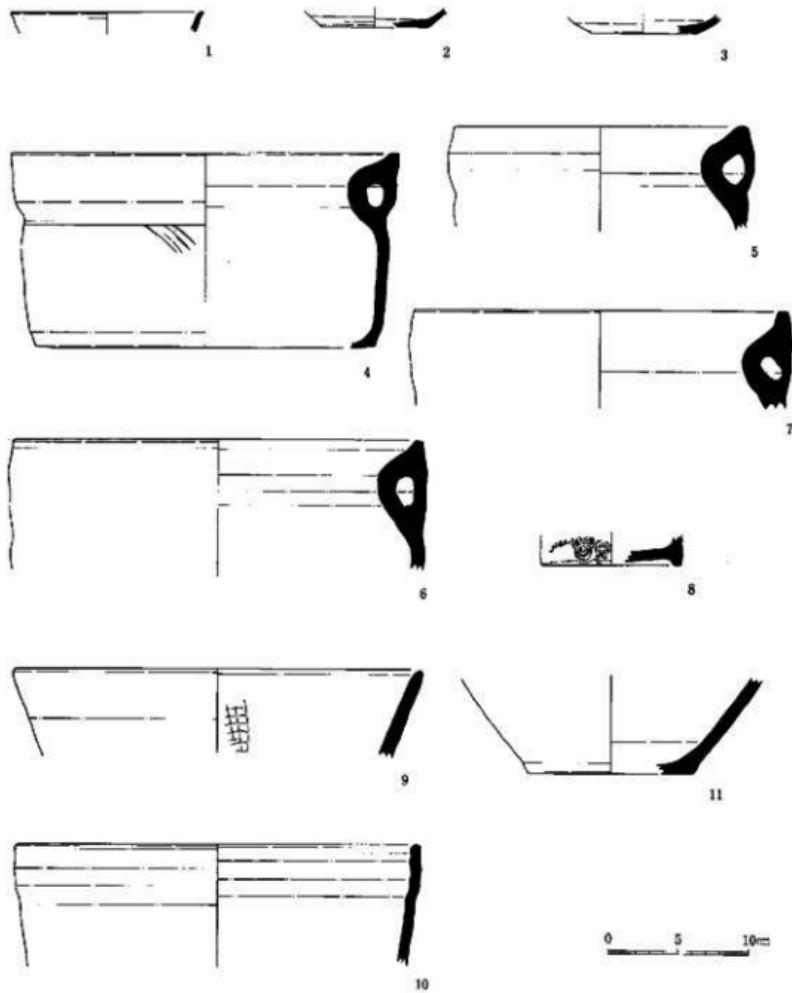
南原遺跡は、竹瀬遺跡の北側に隣接し、行政区域で寿白瀬湖と芳川平田に接する。地形は、牛伏川と庄川の合流地点に近く、南東方向から北西方向へゆるく傾斜していく牛伏川の影響を強く受けたことを思わせる。調査地は、竹瀬遺跡調査地区の150m北側のやや高い水田内に設定した。調査面積は210m<sup>2</sup>である。南側と北側の深掘部分で土層を見ると、I層耕作土:20~35cm、II層黄灰色粘質土:15~20cm、III層黄褐色土混り暗灰色土でやや砂質25~35cm、IV層黄褐色土混り黒色砂質土で表面から-70~-80cmである。この地籍も竹瀬遺跡同様地下水の水位が高いため、IV層まで掘り下げると湧水がある。北側の方が深い。検出面はIII層上面と思われるが、今回の調査では暗渠排水3基が検出されたのみであった。3基とも南側にあり、幅は30~60cm程である。1は南西から北東に、2、3は東南から西北に調査地区を横断しており、1と2は東側で交差している。1のみ針葉樹林と思われる木材を使用している。遺物については、Ⅲ層内及びⅢ層上面に、中近世陶磁器片、砥石、鐵器片等、小量の出土を見ただけであった。



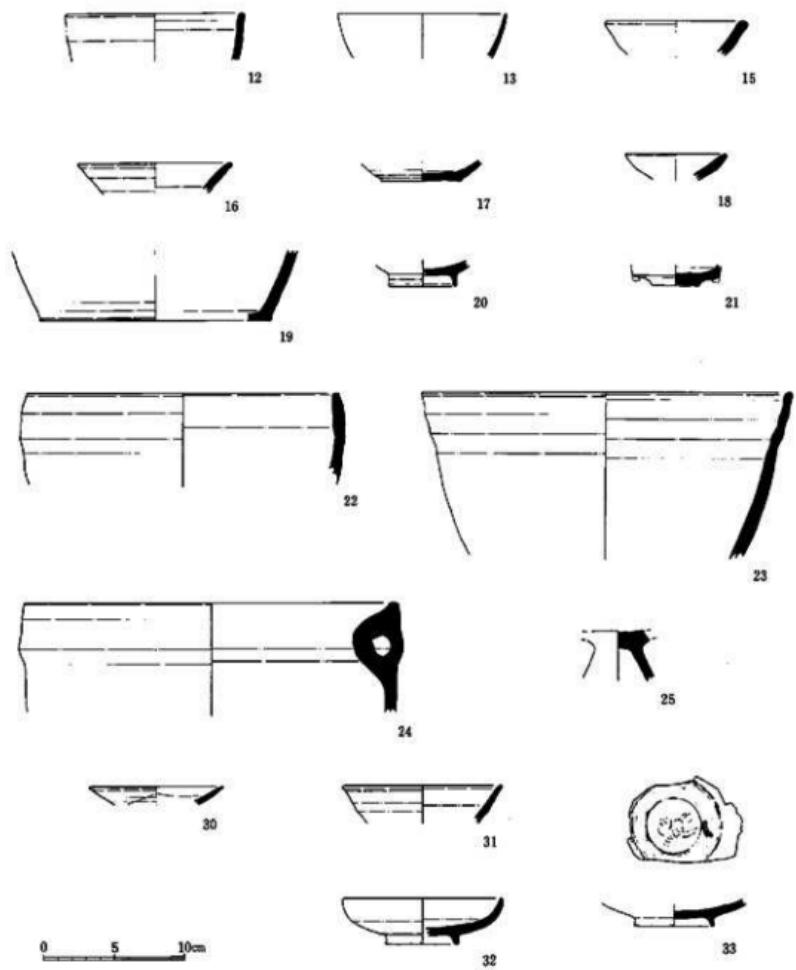
第11回 南原遺跡全体図

土器観察表

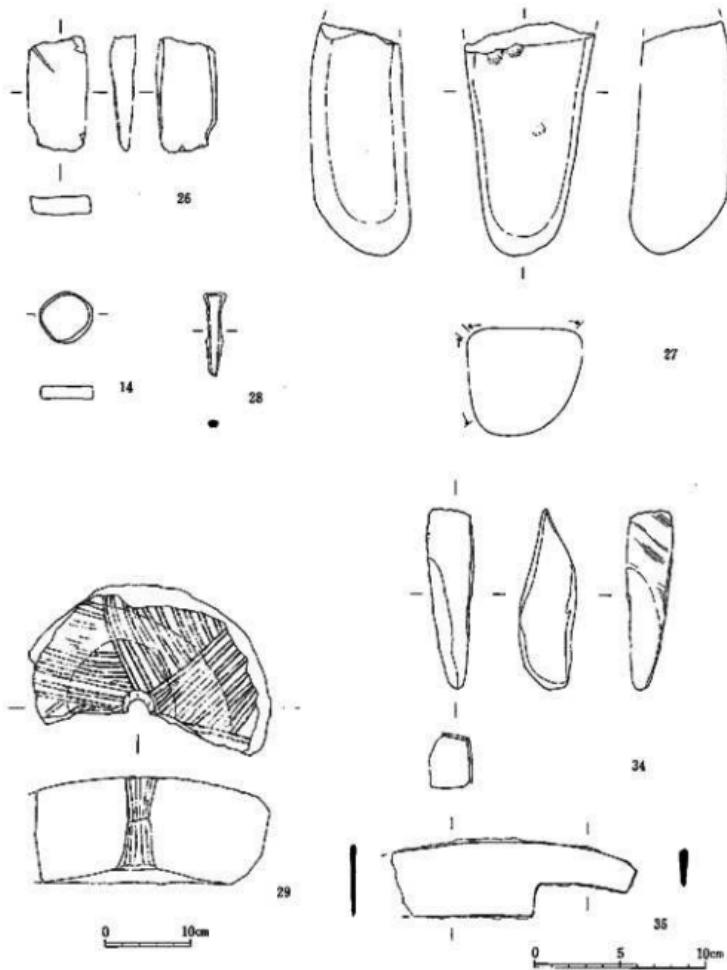
No.	出土地点	種別	器形	寸法			色調			成形・調整・形態の特徴			備考
				口径cm	底径cm	厚さcm	外白	内灰	白灰	ロクロ成形	底部回版糸切り	ケナダ、底部回版糸切り	
1	2住	灰釉陶器	杯	13.6	7.6	4	灰	灰	白灰	ロクロ成形	底部回版糸切り	ケナダ、底部回版糸切り	
2	ビット3	須恵器	杯	。	。	6	灰	灰	白灰	ロクロ成形	底部回版糸切り	ケナダ、底部回版糸切り	
3	ビット5	陶器	土瓶	。	。	10	湯茶碗	湯茶碗	茶褐	。	。	。	ロクロ成形、横ナダ、脚下部タチナダ、ケナダ、底部回版糸切り
4	ビット15	内耳土器	鍋形	27.4	22.0	13.8	291	黒	茶褐	。	。	。	。
5	ビット24	。	。	。	。	20.7	70	黒	茶褐	。	。	。	ロクロ成形、横ナダ、脚下部タチナダ、ケナダ、底部回版糸切り
6	ビット63	。	。	。	。	26.4	75	。	茶褐	。	。	。	。
7	ビット63	。	。	。	。	29.0	122	。	茶褐	。	。	。	。
8	ビット91	陶器	香炉	。	。	10.0	37	緑	茶褐	。	。	。	。
9	F117	内耳土器	香爐形	。	。	60	灰	茶褐	茶褐	。	。	。	。
10	C16	土師質土器	壺?	。	。	13.7	82	茶褐	茶褐	。	。	。	。
11	。	。	壺?	。	。	11.9	278	茶褐	茶褐	。	。	。	。
12	C27	土師質土器	壺	。	。	12.5	8	茶褐	茶褐	。	。	。	。
13	。	土師質土器	円板	。	。	2.8	5	乳白	乳白	。	。	。	。
14	。	。	壺	。	。	10.0	9	黒	黒	。	。	。	。
15	D27	。	壺	。	。	10.9	14	茶褐	茶褐	。	。	。	。
16	E10	。	壺	。	。	5.7	7	茶褐	茶褐	。	。	。	。
17	E17	。	壺	。	。	7.1	14	茶褐	茶褐	。	。	。	。
18	E22	土師質土器	。	。	。	8	茶褐	茶褐	。	。	。	。	。
19	G8	内耳土器	鍋形	。	。	16.4	44	茶褐	茶褐	。	。	。	。
20	。	。	鍋?	。	。	4.7	28	乳白	乳白	。	。	。	。
21	H15	。	鍋?	。	。	3.3	25	灰	茶褐	。	。	。	。
22	J13	内耳土器	鍋形	。	。	22.1	55	茶褐	茶褐	。	。	。	。
23	J15	。	鍋?	。	。	26.2	114	黒	茶褐	。	。	。	。
24	L22	。	。	。	。	26.5	92	茶褐	茶褐	。	。	。	。
25	検出	。	。	。	。	9.5	80	茶褐	茶褐	。	。	。	。
26	。	。	。	。	。	12.0	6	茶褐	茶褐	。	。	。	。
27	。	。	。	。	。	11.3	6	茶褐	茶褐	。	。	。	。
28	。	。	。	。	。	5.0	41	乳白	乳白	。	。	。	。
29	。	。	。	。	。	5.6	50	茶褐	茶褐	。	。	。	。
30	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
31	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
32	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
33	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。



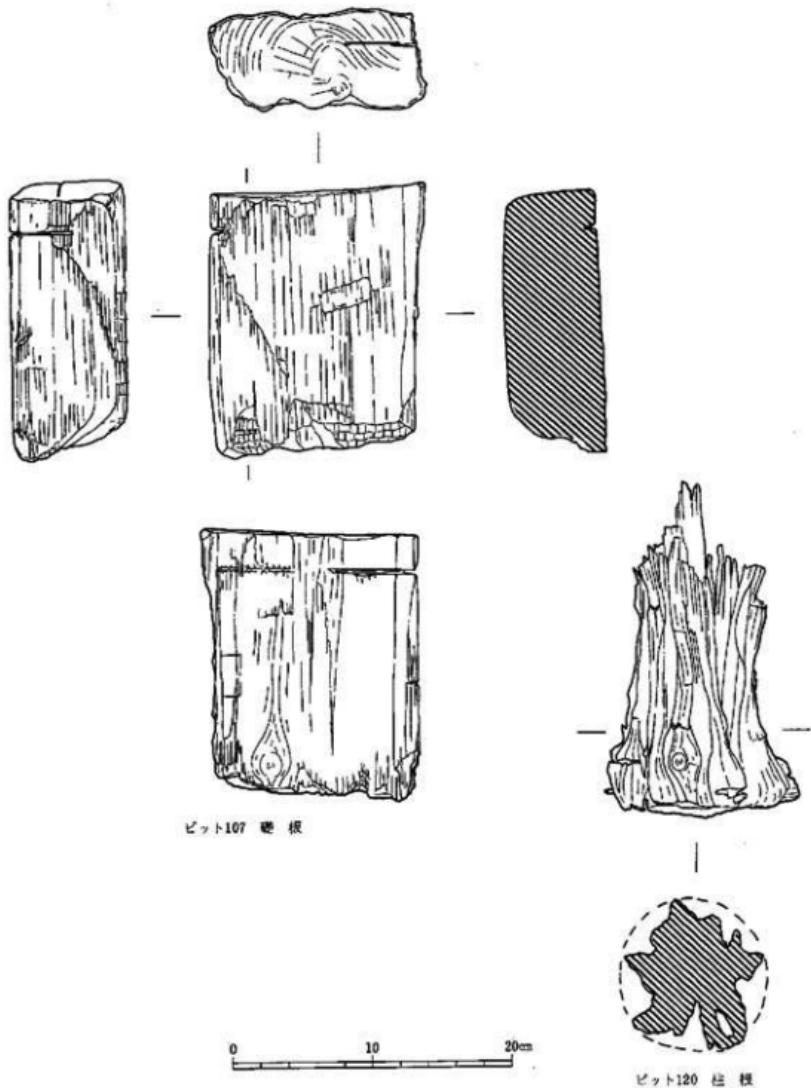
第12図 出土遺物 (1)



第13図 出土遺物 (2) (30~33は南城造跡出土)



第14図 出土遺物 (3) (34・35は南原遺跡出土)



第15図 出土遺物 (4)

## 第5章 調査のまとめ

竹淵遺跡は、今回初めて発掘調査が実施され、遺跡の性格の一端が解明された。この遺跡の立地は鉢伏山麓から流れ出す牛伏川が東側を北流し、西側は塩嶺峠より発祥する田川に囲まれて、これらの河川の形成する扇状地の端部に位置する。このため前稿のごとくたび水害にみまわれたが地下水が豊富で現在でも井戸水を使用している家が多い。同地区は中世の頃に、竹淵郷の名が見られ、中世以後開発の進んだ地域であろう。概出遺物も、内耳鍋、中世陶磁などこの時期のものが多く、今回の調査でも中世遺構の検出が予想された。確認された遺構は、竪穴住居址が2軒と柱穴が主なものである。

ここでは第3章、第2節の補足として柱穴について少し述べてみたい。柱穴130個のうち、柱痕が確認されたものは66個あり、全体の50%を占める。確実に礎石をもっていると認められたものは20個で15%。礎石は全て自然の扁平な石を使用しており、加工の痕は見られない。個数は1ないし2個の組合せで、2個以上は確認できなかった。大きさは20cm前後のものが多く、30cmを超えるものは少ない。礎石の内には火を受けているものや炭化物の付着しているものが見られた。P47の礎石は柱の立っていた部分が周辺より炭化物の付着が激しく、この痕は約9×9cmの方形を呈している。このことは、この上に使用されていた柱が、3寸角程度のもので断面形状は方形を呈するものと推測する。柱痕内に焼土、及び炭化物が入っているものは38個、29%で、混入状況は全てブロック状または焼土粒として入っており、炭化物の混入はほんの少量である。また、炭化材の混入が見られるものはP84のみである。この状態から推測されるることは、①家屋の焼失に伴い柱が根本まで完全に焼失した場合、②家屋焼失後残存した柱を抜き去った場合とが考えられる。前者については、礎石、柱が地上に出ている場合は完全焼失も考えられるが、今回は根本部は20~40cm程土の中に入っているので、地上部は焼失しても根本部分は少なくとも炭化材として残るものと推定される。このため後者が妥当と考えられる。柱根が残っているものは6個で4%。柱穴の内部は、掘り下げるとき床部には水が湧き、このために柱根の木材が残りやすかったのであろう。残存した柱根の中で最も保存状態が良好なものはP120出土のもので、残存高は24cm、断面形は径10cm程の円形と推定する。他は腐蝕が激しく形状等の仔細は不明であるが、断面形が方形を呈すると思われるものはない。また、遺物が出土したものは6個で、4%のみでありほとんど内耳鍋である。以上のことからここに建てられていた建物は、少なくとも敷基あり一部は焼失した可能性が高いと考える。しかし獨立柱建物址の焼失については、検出面に炭化材や焼土の確認ができなかつたため、建物址の焼失状況や廃棄状態等の類例を集成し検討しなくてはならない問題である。また、建物址の時期については、

柱穴からの出土遺物が少量ではあったがそのほとんどが内耳鍋片及び中世陶器片であり、検出面からの出土遺物も内耳鍋片が多く、中世以降に属することはまちがいないと思われる。しかし、詳細な時期区分は今後の検討課題としたい。

次に P107 から出土した礎板について述べる。礎板を使用したものはこれのみで他には見られない。大きさ及び形状は、18×14×7 cm の直方体で、表面の中央に柱が立っていたと思われる浅いくぼみ痕が見られる。礎板の木口は、横挽籠を使用しており、裏面の端にも切りかけの痕が見える。木理方向は割った後、半に調整を加えてあるように見える。表面（柱を立てた面）よりも裏面（土と接する面）の方が平である。保存状態は良好であり、樹種は赤松材を使用している。礎板は登呂遺跡の倉庫跡や大分県安国寺遺跡・奈良県鳴都波遺跡でも遺構の柱底から出土しており、軟弱な場所での柱の沈下を防ぐため、不陸を調節するために、ごく普通に見られる構造ということであり、この竹渦遺跡でも湧水の多い軟弱な土地のために礎板が必要とされたものであろう。

以上本稿では、柱穴を中心に調査の所見を簡単に述べてみたが、中世遺構については今後の調査により、資料の増加を待ち更に検討を加えたいと思う。

最後に、今回の調査にあたって寄協力いただいた北六区土地改良区、地元町会長さんを始め役員の方々、また、7月の炎天下、調査に参加された地元のみなさんへ感謝を申し上げる。

# 図 版



第2号住居址



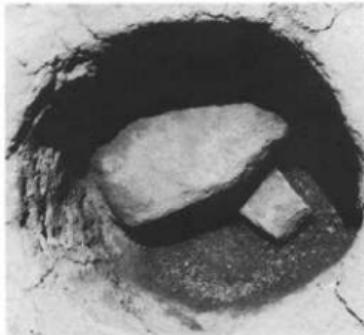
第1号住居址



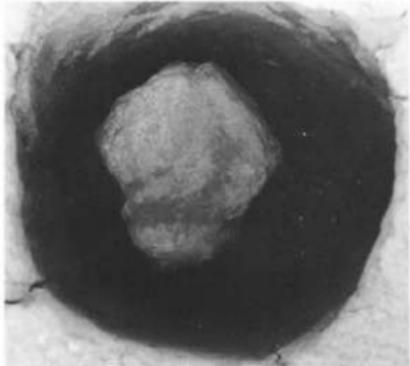
柱 六



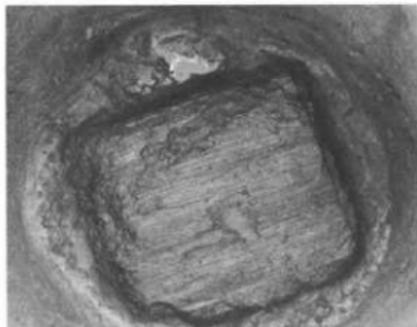
柱 穴



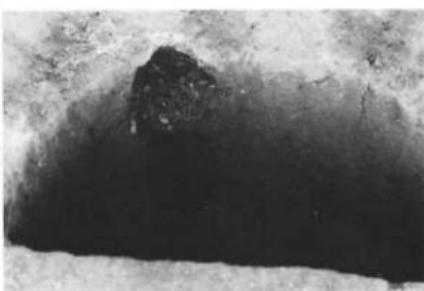
P 42



P 97 基礎石を有するもの



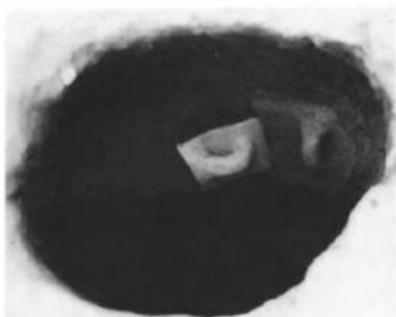
P 107 基礎板を有するもの



P 73 柱痕



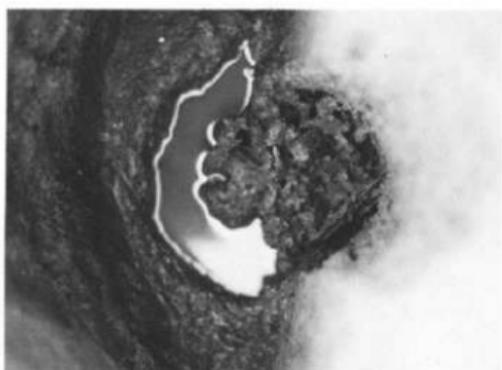
P 63



P 15 遺物出土



P 46



P 120  
柱根を有するもの



P 102  
柱根内に石を有するもの



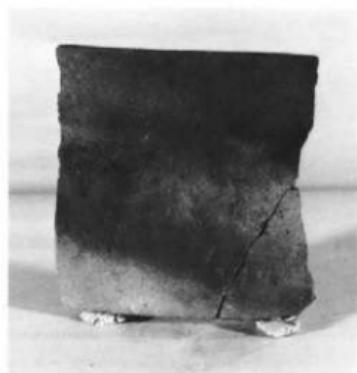
11



4



9



4



5

6

7

24



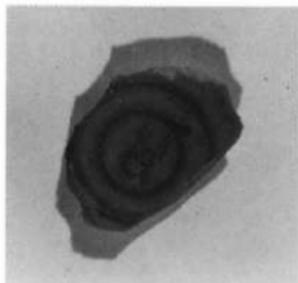
27



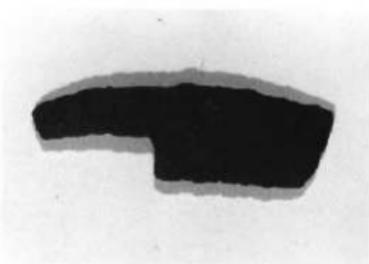
26



29



33



35

33, 34, 35は南原遺跡出土



34



P 22



P 47



P 98



P 120 柱根



P 117

柱穴内の礎石



P 107

礎板

松本市文化財調査報告No.39

—松本市竹淵・南原遺跡—

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社



竹湊遺跡調査全体図

